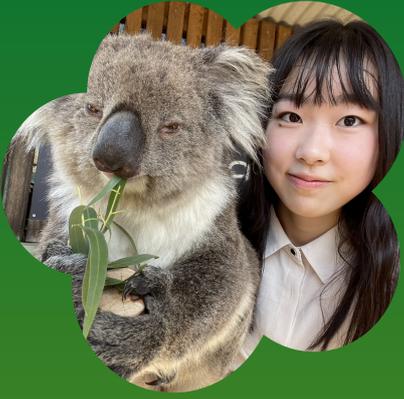




第42回青少年姉妹都市等 派遣報告書 ホワイトホース市

公益財団法人 松戸市国際交流協会
松戸市 経済振興部 国際推進課

内容



派遣者名簿



派遣日程表



実施記録



感想文

青少年姉妹都市等派遣事業

昭和46年から姉妹都市交流が続いているオーストラリアビクトリア州 ホワイトホース市に当協会主催の松戸市高校生英語スピーチコンテストの上位入賞者及び公募の中高校生を派遣する事業です。

両市相互の国際交流を促進するとともに、ホームステイによる滞在と、中高一貫校での授業体験や課外活動をとおした同世代交流とともに、現地において松戸市及び日本の学校生活の紹介を行います。また、派遣後は報告書の作成と次年度の松戸市高校生英語スピーチコンテスト会場で派遣報告を行っています。

派遣者名簿

2024年3月現在

氏名	学校名	学年
上野 翔大	早稲田大学高等学院	高1
富田 波	松戸市立松戸高等学校	高1
木村 明葉	千葉県立松戸高等学校	高2
寺尾 璃	松戸市立和名ヶ谷中学校	中2
瀬谷 梨々菜	松戸市立第二中学校	中2
菅 舞由香	渋谷教育学園幕張中学校	中2
高橋 寛展	千葉県立船橋高等学校	高1
山本 亜依	女子学院高等学校	高2
加藤 結愛	松戸市立小金南中学校	中2
風早 美咲	松戸市立小金南中学校	中2

ダウド マイケル	公益財団法人松戸市国際交流協会	引率職員
沖山 素	松戸市 経済振興部 国際推進課	

青少年姉妹都市等派遣事業（ホワイトホース市） 日程表

月日	現地時間	スケジュール
2024年 3/14 (木) 成田空港発	17:00 19:20	成田空港第2ターミナル集合 カンタス航空にて空路、メルボルンへ 宿泊：機内
3/15 (金) メルボルン ホワイト ホース ホワイト ホース クーン校	07:45 11:30 13:00 14:00 15:00	メルボルン着（入国審査、税関） 移動 メルボルン市内見学 ・クイーンビクトリアマーケット ・セント・パトリック大聖堂 昼食：パスタ イタリアレストランIL GAMBERO ホワイトホース市内見学 ボックスヒルタウンホール タウンホール内ツアー ・松戸ルーム ・ボックスヒル旧裁判所 ・オーストラリアの有名な芸術者の展示 ウエルカムセレモニー ホストファミリーと対面 移動、各ホストファミリー宅へ 宿泊：ホストファミリー宅泊
3/16 (土) ～ 3/17 (日) ホワイト ホース	各自	ホストファミリーと過ごす 宿泊：ホストファミリー宅

実施記録

3月14日 (木)

成田空港発 メルボルンへ



3月15日 (金)

メルボルン空港到着～メルボルン市内観光～クーンナン校



①クイーン・ヴィクトリア・マーケット

南半球最大の市場として知られるクイーン・ビクトリア・マーケットは、1878年にオープンした、歴史のあるマーケット。



②昼食



③ボックスヒールタウンホール

1935年に建てられた、元のボックスヒル市の市役所。1994年、ボックスヒルとナンアワディング市が合併し、ホワイトホース市が作られた。その結果、ホワイトホース市役所は違う場所に移転した。



クーンン校へ

ウェルカムセレモニー

派遣生徒とホワイトホース市長・職員、クーンン校の校長・先生、バディをはじめとした生徒や生徒会長が出席。ホストファミリーとも顔合わせを行い、そのまま各ホームステイ先へ移動した。



3月16日（土）・17日（日）

ホストファミリーと各自過ごした



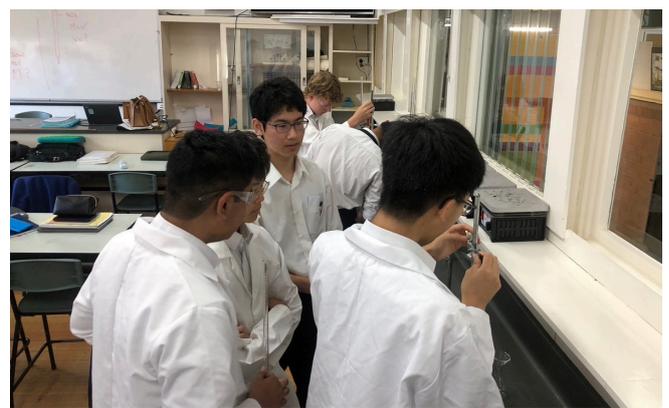
3月18日 (月)

クーンン校・ヒールズヴィル自然保護区へ遠足



3月19日 (火)

通常授業体験



日本語授業体験

オーストラリアと日本の文化クイズに参加。



3月20日 (水)

オーストラリアの有名な花のデザインで版画を作成



派遣生徒によるプレゼンテーション (かるたを紹介)



お別れ



メルボルン市内観光

①ユーレカ スカイデッキ88

2006年に完成し、元オーストラリア一番の高層ビル。
(高さは297メートル)



②ビクトリア州立図書館

1854年に設立された、オーストラリアの一番古い図書館。歴史がありメルボルン人にとっては大人気の勉強スポット。



③ ترام（路面電車）乗車体験

メルボルンならではの交通機関。メルボルン市内で「Free Tram Zone」という制度があり、トラムに無料で乗れる。



④ フリンダース・ストリート駅

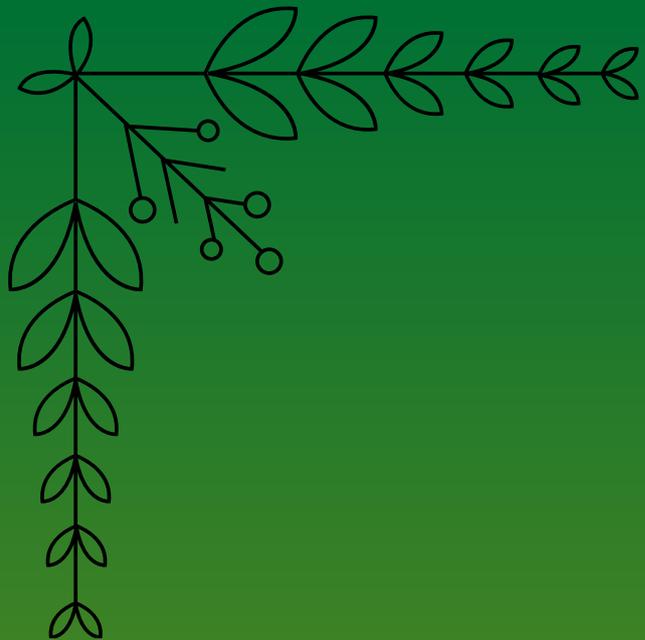
フリンダース・ストリート駅は、1854年に完成し、オーストラリアの歴史的な駅。メルボルンのシンボルとして国内外から愛されている。



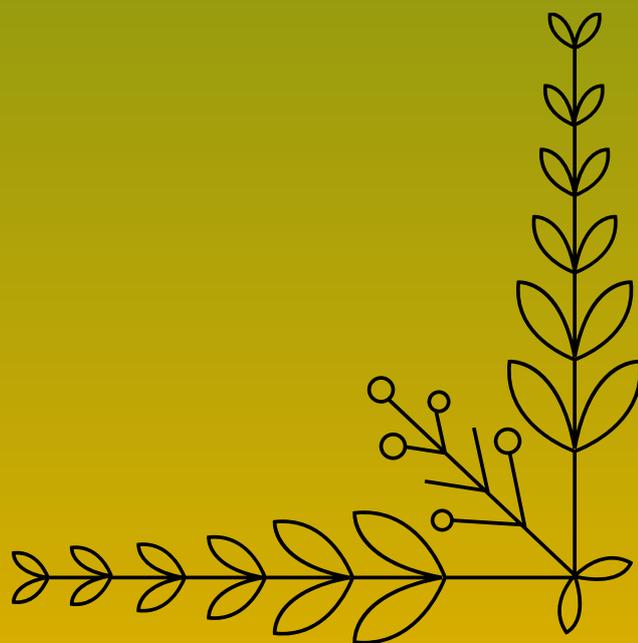
⑤ ホージアレーン

ホージアレーンは、フリンダース・ストリート駅の近くにある小さな路地で、定期的に変わる落書きと、新進気鋭の現代アーティストの作品のギャラリーになっている。





派遣生徒 感想



オーストラリアで得られたもの

上野 翔大

私は、日本を出発する前に、この姉妹都市派遣で達成したい目標を立てた。まずは、ホストファミリーやバディと仲良くなり、帰国後も長く続くような関係を構築すること。次に、日本の文化や、私が好きな日本のアニメについて紹介し、逆にオーストラリアの文化を学ぶこと。そして、自分の英語力を伸ばすことである。

そのために、連絡先を交換するための英語の名刺を作成した。また、会話に困らないよう、話したい内容を日本語と英語の両方の言語でまとめた表を作成した。扇子や三体の起き上がりこぼし、和柄の茶碗や手ぬぐい等の日本特有のお土産も用意した。

オーストラリアに到着し、ホストファミリーやバディと実際に対面すると、全員優しく、私がかまく英語を話せない時も気長に聞いてくれ、またゆっくり話しかけてくれた。その結果、英語で会話することが楽しくなり、自分からも進んで英語で話しかけられるようになった。知り合った人には名刺を渡したため、そこから会話を広げることもできた。ホストファミリーやバディも含めて、日本に興味を持っている人が意外と多いと感じた。日本語であいさつしてくれたり、日本の音楽やゲーム、アニメ等の話題で会話したりし、楽しく過ごすことができた。出発前に作成した表は、使うことなくスラスラ話すことができ、最終的には自分の英語に自信を持つことができた。持参したお土産も喜んでくれ、準備をしておいて良かったと感じた。

出発前に立てた目標は、全て達成することができたと思う。まずは英語力は伸ばすことができた。また、ホストファミリー、バディ、クーン校の生徒と仲良くなり、名刺を渡したことでインスタグラム等の連絡先を交換することができた。帰国後の今も、連絡を取ることができている。さらに、日本とオーストラリアの文化や生活の違いについても話し合うことができた。ホストファミリーと生活する中でオーストラリアの文化を身をもって体験することができた。ホストファーザーがスウェーデン出身だったため、スウェーデンのスタイルの朝食を食べる等、日本とは違う文化に多く触れることができた。

これからは、今回の姉妹都市派遣で仲良くなった人たちとの交友関係を続けていきたいと思う。帰国後も連絡を取っていることは先ほど書いたが、今後はビデオ通話等もする予定を立てている。この姉妹都市派遣では、オーストラリアの人たちと仲良くなり、かけがえのない思い出を作ることができたため、とても貴重な経験となった。



ホワイトホースの温かさ

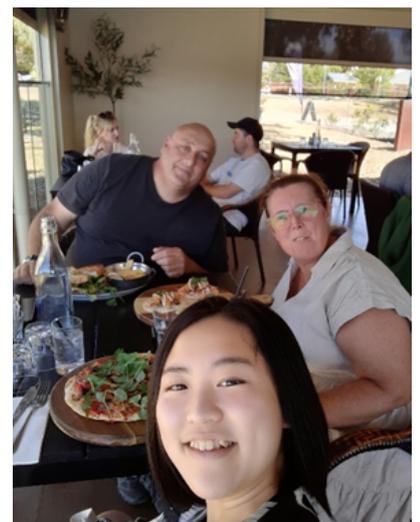
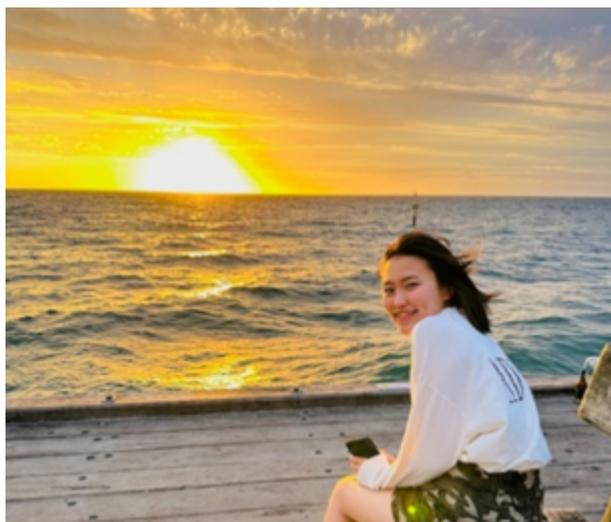
富田 波

せっかくこんなチャンスを手に入れることができたのにも関わらず、出国前、成田空港に向かう途中の電車で私は急に不安に陥っていた。数回しか会ったことのない同年代の仲間と、初めての環境で生活すること。それは私にとって新たな挑戦で、楽しみな気持ちと共に憂慮に堪えなかった。到着後、そんな不安をかき消すかのようにメルボルンの陽気と爽快な風が心地よかった。この場所で絶対に素敵な経験ができると、確信した瞬間だった。

メルボルンは自然が豊かなところで、日本では見たことのない種類の野鳥達の鳴き声、見惚れてしまうほどの夕日と海、輝き渡る満天の星空。その全てをホストファミリーが私に教えてくれた。彼らは私のために分かりやすい英語で話してくれたり、私の気持ちを最優先してくれたり、とても親切だった。星空の下で時間を忘れるほど、色々な話ができることが心に残っている。日本に行ったことがないがとても興味があると言っていたので、日本の文化を沢山教えることでコミュニケーションを図ることができた。中でも、ホストファザーは車好きで、HONDAをこよなく愛していた。そのため、日本車の会社名は創設者の苗字であることを教えた時は彼の反応が面白くて、上手く伝えられた気がして嬉しかった。それと同時に、海外の方に好まれているという、日本車の技術や進化が日本人として誇らしかった。

彼らと共に生活する上で、気がついたことがある。メルボルンの人々はレジでお会計をするとき、店員と友達のように親しく会話する。ビーチで隣にいる夫婦にも同様に話す。相手の今の調子をきいたり、今日のできごとや景色(商品)の感想を話し始める。これらは、日本ではあまり見ない光景だと思った。その理由は、言語が背景にあると考えた。日本語には、敬語が存在する。初めて会った方を他人として認識し、敬語を使う。だが、英語に敬語は存在しない。だからこそ、彼らは相手が誰であれ同じ人間としての仲間意識があり、フランクに会話するのだろう。また、ホストファミリーが私に対して本物の子供のように接してくれたのも、そこが関係しているのかもしれない。私はそのメルボルンの人々のフレンドリーな所が大好きになった。

そして、日々を重ねるごとに派遣者十人の仲も深まっていき、このメンバーと参加することができて心から良かったと思っている。これからも、この経験を自信に繋げて物事に挑戦していきたい。



HAVE CONFIDENCE

木村 明葉

私は今回の派遣事業に参加するまで、外国に行ったことも外国の人と交流をしたこともありませんでした。

そんな中でスピーチコンテストに参加し、賞を頂けたことで今回の留学のチャンスを掴むことができたので、本当に嬉しく思っています。

私は派遣が決まった8月から実際に行く3月まで、ずっと不安でいっぱいでした。学校も学年も違う人達と一緒にいくことにも、作ったことのないプレゼンを作ることに、何より英語で会話をすることに1番の不安を感じていました。

ですが、私が不安を口にすると、必ず友達や家族、同じ派遣生の人達が、間違えてもきつと大丈夫だよ、自信持って、と暖かい言葉をかけてくれました。

その言葉で、少しずつ自信をつけることができたので、オーストラリアにいる期間は間違っていていいから、できる限り英語で話すことを目標に毎日を過ごしました。

そうしたことでホストファミリーやクーン校の生徒の人達、同じ派遣生のみんなとも絆を深めることができたので本当に嬉しかったです。

オーストラリアでの日々は本当に忘れられないほど楽しい毎日でした。

ホストファミリーもバディもとても親切で私の不安を吹き飛ばしてくれるような人達でした。ホストファミリーは休みの日だけでなく学校終わりにプールやビーチに連れて行ってくれたり、映画を見たり、一緒にクッキーを作ったりと、私に対して本当に良くしてくれました。

また、バディとはお互いに日本の名前、英語の名前を付けあったり、日本語と英語を混ぜて会話をしたりなど、言語の壁を越えて仲良くなることができました。

中でも印象的な出来事はホストファミリーの誕生日パーティーに行ったことです。私は今回、ホストファミリーの孫の1人、ジェームス君の誕生日パーティーに参加させていただきました。日本から来た留学生だ、とたくさんの親戚の人達に紹介してもらい、一緒に遊んだり話したりご飯を食べたりして本当の家族のように接してもらえたことがとても嬉しかったです。

今回の派遣事業で、私はたくさんの親切な人に恵まれ、最高の思い出を作ることができただけでなく、失敗を恐れずに人と関わるべきだということを学ぶことができました。この経験を今後の人生にも活かして、より多くの人と交流していきたいと思えます。



出会い

寺尾 璃

僕はまず初めに、日本の文化を伝えると共に外国の文化を知ることや、様々な人と交流をしコミュニケーション力をあげることを目標にして、オーストラリアに行こうと思いました。

派遣に向けて準備をするようになってから、オーストラリアへ一人で行くことの実感が湧き、当日が近づくにつれ不安も多くだいぶ緊張していたのですが、一緒に行くみんなの支えや、仲が深まったこともあり、次第に「楽しみ」という気持ちが強くなっていきました。

オーストラリアに着いた日は、バディのジェイソンやホストファミリーとの初対面だったので緊張していましたが、みんな優しく伝わりやすいように伝えてくれるので、初めての交流でも楽しく会話することが出来ました。

休日は、ホストファミリーとアメリカンフットボールを観戦に行きました。2日目は、ホストブラザーのジャスパーが加入しているチームの試合を観戦しました。僕はルールが分からない中、優しく分かりやすく教えてくれたので、観戦を楽しむことが出来ました。その後、海を見に行きました。

3日目は、AFL Victoriaの試合を観戦しました。プロの試合はやはりすごく、得点が決まった時の歓声は応援してるみんなが一丸となっていて応援していて楽しかったです。

4日目、5日目、6日目、7日目には学校がありました。学校内では、ジェイソンがすごく助けてくれて、授業に参加することが出来ました。クラスメイトの子も話しかけてくれたりする子が多く、色々な人と話すことが出来ました。学校最終日にはホストファミリーや学校みんな、ジェイソンとお別れがありました。僕は長く会えなくなるような別れを体験したことがないので、また会うことを約束して悲しむことなくお別れすることが出来ました。

オーストラリアで1番心に残っていることは、食の美味しさです。外食はもちろん、ホームステイの毎日のディナーが本当に美味しくて、毎日写真を撮って日本にいる友達や家族に自慢するほど最高でした。以上のことを踏まえて、いつかオーストラリアでも住めるように、これからはより一層英会話の知識を上げて1人でも移住できるようにしたいと思います。



オーストラリアで感じた事

瀬谷 梨々菜

私は松戸市青少年姉妹都市派遣事業に参加させて頂き、感じたことがたくさんありました。その中から特に印象深かったことを2つ紹介させていただきます。

1つ目は自由です。

日本は様々な細かいルールがあり、人々はルールに添って生活しています。ルールを守る事を幼少の頃から学校等で学び、多くの人はそれを身に着けて来ました。規律を守る事・ルールを守る事が正しいと言う教えを受けて来たため、自分の考えや自分の意見が言えなかったり、それを行動する事ができない人が多いと思いました。オーストラリアへ行って感じた事は、自由な発想や自由な表現、発言、自己主張が出来ると言う事です。人と違って良い、人目も気にしない、自分のやりたい事をやる自分の考えで行動すると言う事を強く感じました。もちろん、法律や、学校内のルールなどは最低限守らなくてははいけません。その中で、他人と比較したり、周りの目を気にし過ぎるのはあまり良くないなと感じました。短期間でしたが、オーストラリアで過ごした日々は、周りの目を気にする事もなく、ありのままの自分を出せていた気がします。わからない事をわからないと言う勇氣、物事を曖昧に終わらせないでYES・NOをはっきりさせる事を学びました。

2つ目はオーストラリアの人の明るくフレンドリーな性格です。

最初にバディやホストファミリーに会った時は凄く緊張していて、何を話せばよいか、私の英語が通じるのか、1週間うまくやっていけるのかとても不安でした。しかし、明るく私を受け入れて下さり家族同然のように接してくれて、バディともすぐに仲良くなれました。ホストファミリーには2歳の女の子がいて、保育園のお迎えにも行きました。保育士さんが私に向かって「こんにちは！」と日本語で挨拶をしてくれて話が盛り上がり、保育園に通っている小さい子達も日本人である私と接した事を喜んでくれて、とても嬉しかったです。オーストラリアの方は小さい子から大人まで優しくて温かくて笑顔が素敵な明るい人が多いんだなと思いました。

私はこの短期留学に行って、改めて日本人である事に誇り持つと共に、海外で生きて行く為に自分の殻を破り、積極的に行動して行く大切さも学びました。私は今年の9月からカナダのセカンダリースクールに長期留学します。オーストラリアで経験した事を生かし、留学を成功させたいです。色々な国の方との交流を大切に、日本人として立派な国際人になれる様に努力したいと思います。素晴らしい経験をさせて頂いた松戸市に感謝しています。ありがとうございました。



今回の国際交流

菅 舞由香

私が今回の国際交流でオーストラリアに行って感じたことは2つあります。1つ目は、オーストラリアの人は、グローバルな価値観を持っていることです。日本は単一民族国家で、皆似た様な顔をして同じ日本語を話しています。そのため、他の国をルーツに持つ人がいると浮いているように感じることがあります。一方オーストラリアは多民族国家で、全く違う国からやってきた人が沢山います。そのような環境では、1人ひとりのルーツが違うことというのは当たり前でどこの国から来た人かというのは個性の1つとして認識されているように感じました。同じ英語でも色々な国の訛りが混ざった言葉が飛び交う環境はとても不思議で、また貴重な体験でした。そしてオーストラリアの人々は皆、オーストラリア人としての誇りと自分のルーツの誇りを持っていて、「皆んな同じオーストラリアに住むオーストラリア人ではあるんだけど自分たちの故郷もとても大切に思っている」というのを感じたのが日本と大きく違うところだと思いました。

2つ目は、親切でフレンドリーな人がオーストラリアには多いことです。日曜日にホストマザーが動物園に連れて行ってくれたときの事です。なぜかカーナビに番地を入れることが出来ず、動物園まであと数キロのところまで迷ってしまいました。その時ホストマザーはガソリンスタンドのスタッフさんや近所のお家に訪ねて行き、カーナビを入力して貰って無事に着くことが出来ました。もちろん全員が全員というわけではありませんが、オーストラリアの人は人と人の距離が比較的近く、初対面の人でも打ち解けやすい印象がありました。知らない人とは挨拶すらほとんどしない日本との差が大きく、スーパーでレジ打ちの店員さんに話しかけられた時はかなり驚いてしました。人と話すことは幸せな気持ちを生みます。日本でもオーストラリアほどまではいなくても、もう少し挨拶がしやすくなれば日々をもっと豊かになるのになあと思いました。

1週間というのは海外に行くのには少々短すぎる時間でした。しかし、今回得られたものは数え切れないほどあります。ホストファミリーやバディと過ごした時間は私の大切な宝物です。これからも交流を続け、いつか必ずオーストラリアにまた行きたいと思います。



オーストラリアでのホームステイを通して、私の意識は大きく二つ変化しました。一つ目は広い視野を持てるようになったことです。オーストラリアでは、人々の価値観も、食文化も、すべてが新鮮で、日本のすべての当たり前が当たり前ではなくなりました。同時に、その背景やどうしたらもっと良くなるだろうか、ということに意識が向けられるようになった瞬間でもありました。例えば日常会話。日本語は非常に婉曲です。法学部の兄が読んでいる本はとてもまどろっこしく、たまに読む私も時々投げ出したいくなります（笑）。オーストラリアでの直球なやりとりが自分には合っているように感じられ、楽しかったです。その一方で、日本文化の良さも感じる事ができました。英語には、“いただきます”“ごちそうさま”を表す言葉がありません。ホストファミリーとピザを作ったとき、“いただきます”はどういう意味があるのと聞かれました。いただく命と料理を作ってくれた人への感謝だと伝えると、みんな“いただきます”と言ってくれました。日本の万物に対する感謝の姿勢を共有でき、うれしくなりました。それと同時に、慣れてしまっていた、実は普通じゃない「当たり前」に改めて気付かされました。

二つ目は何事にも前向きに取り組めるようになったことです。ホストファミリーとの会話や、高校での日本語以外の授業は全て英語で行われました。相手の言葉を理解できているのかすらわからなかったので、自分がわかったと思った事は、自分なりに表現するようにしたら、自分の言葉を理解し相手が笑顔でうなずいてくれるようになりました。自分が相手を理解しようとしていること、相手も自分の反応を気にしてくれていることがわかり、互いに思いが通じたと感じました。これは、コミュニケーション全般で言えることだと思います。相手を理解しようとする事、自分が理解していることを相手に伝えようと精一杯努力することが、一番大事なのだと強く実感しました。相手に伝わらないと言葉には意味がない、理解していることを伝えないと理解したことにはならない。そんなふうを考えるようになり、会話のみならず、日常生活の様々な場面で前向きに取り組めるようになりました。

このホームステイを通して、自分の価値観が大きく変わりました。既成観念が大きく壊れ、あらゆることに対し意欲的に取り組めるようになりました。この8日間は一生の宝物となり、これからの自分をつくっていくかけがえのない経験であると確信しています。この派遣に際して準備・支援してくださった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



私の学校では毎年アジア・アフリカ祈祷週間があり、実際に現地で働く方のお話を聞いて世界の貧困問題に目を向けている。特に私の学年は毎月献金を行い、ケニアに住む子供が学校に通うための支援活動を続けている。この事がきっかけで国境を超えた繋がりに興味を持ち、今回「青少年姉妹都市派遣事業」に応募した。

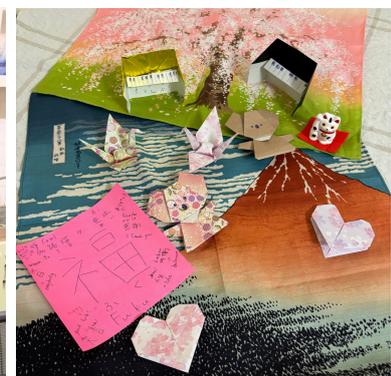
ホストマザーは南アフリカ出身で、5年前にオーストラリアに移住してきた方だった。私はアパルトヘイトについて教科書的な知識しかなかったのだが、日常生活にどう影響したのかを聞かせて頂いた。以前は主に白人、混血、黒人の3つのグループごとに居住地や学校が決められており、その格差を認識しないように政府からテレビの所有を制限されていたため、彼女は白人以外の人と深く関わる機会が無かったらしい。しかし娘が学校に入学する時にグループの縛りが無くなったので、人種に関係なく友達を作りなさいと教えたことと仰っていた事がとても印象に残っている。歴史を学ぶ上で政治体制や出来事を覚えるだけではなく、大勢の一般市民の存在がある事を忘れてはいけないと感じた。

そして現在、彼女はオーストラリアの特別支援学校に勤務されている。自閉症からADHDや知的障害の子まで幅広く通っているため、1対1、または少人数グループ体制が基本となっており一人一人の特性を見分け、その子に必要なサポートをしているそうだ。一般の学校では気にも留めないであろう小さな成長を大事にしており、〇〇が出来るようになった、彼(生徒)は毎日成長している、と話してくれる彼女は笑顔で溢れていて、不思議と私の心もふっと軽くなるような気がした。学校の施設はとても充実していたのだが、それが公立学校だったと聞き大変驚いた。

また、性的マイノリティへの理解も深かった。昨今の日本も何かと多様性が叫ばれているが、個性を尊重しなければいけないから認めるという風潮から認めるという風潮があり根本的な理解は根付いていないように感じる。しかし、オーストラリアでは性的マイノリティである事や内面的な事をオープンにしているという印象を受けた。

これは、アボリジニの人々は土地を没収され強制的に働かされたという歴史を持ち、移住してきた大量のアジア系を差別する事を憲法にもりこんだ白豪主義であったものの、第二次世界大戦後はアボリジニの市民権が認められたり、人種差別禁止法を制定したりするなど多様性を認める社会へ移行してきたオーストラリアならではの環境で、どんな人にとっても居心地が良いのだろうと思った。

最後になるが、松戸市出身の者としてホワイトホース市との交流に関わる事ができ大変光栄に思う。姉妹都市関係が末長く続き、より国際色豊かで多様性に富んだ松戸市になるよう貢献していきたい。



私は初日、クーンン校でバディーに会い、そのあとホストファミリーと初めて会った。ホストファミリーがインドネシア人だということは知っていたが、オーストラリアに住んでいるのだから英語を話すと思っていた。しかし、ホストファミリーの車に乗り家に向かう途中、私は勇気を出してホストファミリーに話しかけた。私が英語で話しかけると、ホストファミリーは私が話している英語を理解できてないような素振りを見せた。ホストファミリーが年配だったことであり、私はなるべく近くで、大きな声で、ゆっくり話してみた。返事を返してくれたものの、私はホストファミリーが言っている言葉を理解できなかった。その言葉は別の国の言語のように聞こえた。

また、家に着いてからも会話がはずまず。また、伝わらず、これから一週間過ごすことができるか、不安になった。しかも、両親は、インドネシア語で話すのだ。そのまま一日が過ぎ、私はこのまま1週間何も話さないで終わるのか言語が伝わらない人とのどのように話せばよいのかと落ち込んでいた。しかし、私はふと「これは、国際交流なのだ。」と思い、違う国の文化や価値観などを学び、勇気を出して、コミュニケーションを取ろうと思った。

2日目、私は言語が伝わらないので、ジェスチャーなどでホストファミリーと会話をするにしてみた。すると、ホストファミリーが笑顔になり、英語で話そうとしてくれるようになった。英語やジェスチャーで言葉表現し合い、いつの間にか、相手が何を伝えたいのか何となく理解し合っていた。またホストファミリーが話していた言葉がインドネシアなまりの英語だったことに気が付き、英語で私に話しかけてくれようとしていたことにとてもうれしく感じた。

私は言葉が伝わらなくても伝えようと努力することで、だんだんお互いの気持ちを理解することができることを学んだのでこれから、人生において言語が通じない人たちと会った際に、ジェスチャーなどで伝えようという努力をしながら、コミュニケーションを取っていきたいと思った。

3日目以降、ホストファミリーと会話をするのができ、また、ホストファミリーが笑顔になってくれて、私まで笑顔になった。また、クーンン校ではたくさん友達を作ることができ、日本では見れないコアラやカンガルーなども見ることが出来た。また、日本の良さを現地の人に伝えることができたので、こんどは、オーストラリアのよさを日本人達に伝えていきたいと思う。今回の姉妹都市派遣を通して、オーストラリアの文化や価値観、また、別の国の人とのコミュニケーションをとる上で大事なことを学ぶことができてものすごく嬉しかった。貴重な経験を与えてくださり本当にありがとうございました。



大切なのは“笑顔”と“気持ち”

風早 美咲

私が合格と聞いた時はとてもワクワクしたし毎日沢山の想像をしていました。英語は小さな時から習っていたし、英検も他の人より1級、2級と上の級を取っていたのである程度の会話はできるのではないかと思っていたのであまり不安はなく楽しみだけで飛び立ちました。ですが初日ホストマザーと会い、初めての会話をした時私は一気に不安になりました。聞きとることもままならず、相槌することで精一杯になってしまいました。初日の夜は不安と心配でいっぱいでしたが、そこで変えてくれたのがホストマザーと毎日見たサンセットです。家から歩いてすぐのところにとっても綺麗な海があり、サンセットを見ながら沢山の話をしました。私が初めて話しかけたのもその時でした。話さないと何も意味が無いと思いき細なことです。信号機の音が日本と違い日本はピッポーピッポーとなるんだよと言うとホストマザーは笑って面白いねと言ってくれて私の中では一気に距離が縮まったと思っし、伝わった！あつてることより話すことの方が大切なんだと考え方が変わりました。

私はもうひとつホストマザーとの会話で記憶に残っていることがあります。バディと初日あまり上手に話せなかったと相談すると、「そんなの全然大丈夫！私なんて日本語はありがとうしか知らないわ。そんなに小さな歳で1人で来ること自体すごいことなのよ」と言ってくれました。私はその言葉を聞いて間違っているもいいんだ、自信を持っていいんだと思ひ、不安が吹き飛びとても楽しくなりました。

そしてオーストラリアに行き強く感じたことがあります。それはみんなとても友好的で温かい人達ばかりだなと思ひました。店員さんや初めて会った人とも友好的で常に笑顔で話しているというところです。ショッピングセンターに連れて行ってくれた時会計の際、最後に必ず笑顔でHave a nice day!と言ってくださったり、私が困っている時にはごちゃごちゃの英文でも常に笑顔で対応してくださったり、とても素敵だと思っし、とても良い文化だなと思ひました。

今回自分の目標として悔いのないように楽しんでこようと心掛けていました。この経験は英語の向上はもちろん、写真や文では書ききれない程の貴重な体験をさせてもらいました。この経験を無駄にしないようこれからも努力を続けていきたいと思ひました。





姉妹都市 ホワイトホース市

Sister City Whitehorse

オーストラリアビクトリア州の州都メルボルンから東へ約 15km、電車で約20分の距離にある街。面積は約64km²で松戸市（約61km²）とほぼ同じ広さ。人口は約15万人で、松戸市（約49万人）のおよそ3分の1です。

ホワイトホース市は、約 350の公園や保護地区をもち「ガーデン・シティ」とも呼ばれ、自然の緑と人々の活気が調和した街です。また、市内には小学校が38校、セカンダリー・カレッジ（中・高校）が14校、専門学校が1校、大学が1校あり、社会人向けの生涯学習施設も充実していて、「City of Learning(学びゆく都市)」をモットーにした街づくりを進めています。



松戸市とは 1971年（昭和 46年）より姉妹都市提携を結んでおり（当時はボックス・ヒル市）、2023年（令和 5年）5月12日で姉妹都市提携 52周年を迎えました。